

複合動詞「～こむ」の程度深化の用法

甲斐 朋子

要旨

複合動詞「～こむ」には「～に入る／入れる」という、方向性添加の用法と、「すっかり～する」「十分に～する」という前項動詞の程度を深めていく程度深化の用法が見られる。本稿では程度深化の用法について、①前項動詞の意味、②前項動詞の格支配、③「～こむ」全体の意味、④「～こむ」全体の格支配から、「こむ」が付くことによって、前項動詞のどのような行為又は状態が深められているのかを導き出すことを目的とする。又、分類の際には日本語学習者への導入を念頭に置いた。学習者の理解を容易にするため、前項動詞の単純動詞時の意味が「～こむ」の中でも保持されているものと、そうでないものを別項目とし、一括して扱わないようにした。

キーワード：程度深化の用法、方向性添加の用法、前項動詞の意味と格支配、「～こむ」の意味と格支配、日本語学習者

1. はじめに

複合動詞「～こむ」には、大きく分けて、二つの用法が見られる。一つは、「飛びこむ」「押しこむ」のように、「～(場所、領域)に、～(方法、様態)して入る／入れる」といった方向性を添加する用法¹⁾であり、もう一つは「考えこむ」「買いこむ」のように、「すっかり～する／十分に～する」という前項動詞²⁾の状態や、動作の程度を深めていく用法³⁾である。これらの表現はどちらも日常よく使われるものである。日本語母語話者は、「～こむ」の異なる二つの用法において、どの動詞が「こむ」の前項動詞と成り得るかを自然と選び分けている。しかし、日本語学習者にとっては、その選別は容易ではないことが推測される。本稿では、複合動詞「～こむ」の用法のうち、程度深化の用法を取り上げ、その前項動詞の意味と格支配⁴⁾、「～こむ」の意味と格支配から分類を行った。その結果、「こむ」が付くことにより、「こむ」が前項動詞の行為や状態のどの部分に焦点を当て、その程度を深めているのかということが明らかになった。日本語学習者への提示として、程度深化の用法に該当する「～こむ」群を「すっかり～する／十分に～する」と、一括して扱うのではなく、分類別に提示したほうが学習者の混乱が少ないことが期待できる。

研究対象として、姫野(1978)の巻末リストから、複合動詞「～こむ」(275語)を用い、その実例を「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」及び、「類語辞典」などから抜き出し、それらを分析した。

2. 先行研究

複合動詞「～こむ」の程度深化の用法について、姫野(1978)は以下のように述べている。「程度進行」に属するものは、前項動詞の意味的特徴(進行の様態)によって三つに分類できる。

①固着化：動作・作用の結果、ある状態に到ったまま固定化しているもの。

眠りこむ、寝こむ、黙りこむ、ふさぎこむ、しょげこむ、弱りこむ、覚えこむ、話しこむ、など

「[人] が ～こむ」という格支配をとり、「[自動詞+こむ=自動詞]」、「[他動詞+こむ=他動詞]」になるとしている。

②濃密化：程度が高まり、状態が昂進していくもの。

老けこむ、やつれこむ、冷えこむ、枯れこむ、咳きこむ、たてこむ、めかしこむ、だましこむ、更けこむ、など

[[名詞] が ～こむ] という格支配をとり、[自動詞+こむ=自動詞]、[他動詞+こむ=自動詞] になっている。

③累積化：何かの目的のため、人が動作や行為の積み重ねよりその技や対象とするものの質の向上を図るといふもの。

歌いこむ、泳ぎこむ、漬けこむ、煮こむ、洗いこむ、食べこむ、使いこむ、磨きこむ、練りこむ、など

[[人] が ～こむ] という格支配をとり、[自動詞+こむ=自動詞] になり、[他動詞+こむ=他動詞] になっている。

姫野氏の言葉から、それぞれの前項動詞の特徴をまとめると以下のようなになる。

- ①固着化に属する動詞の性質：人間の心理作用や生理作用、思考作用などに関するもの
- ②濃密化に属する動詞の性質：状態変化を表すもの。
- ③累積化に属する動詞の性質：繰り返しのきく、人間の意思的行為。

森田氏は「基礎日本語辞典」(1988)において、「～こむ」の用法について次のような分析を行っている。そこでは、まず、「～こむ」が自動詞であるか、他動詞であるかで二分し、それぞれについて、本論で言うところの方向性添加の用法と、程度深化の用法の二つに分けている。そして、その事柄の主体は何か、また、主体が行為を向ける対象は何か、また、前項動詞は意志動詞か無意志動詞かなどの点から「～こむ」を分析し、それがどのような格支配をとるのかで意味分類を行っている。

自動詞で程度深化の用法に属する語は「…ガ～こむ」という格支配をとり、主として状態性の動詞、または動きを伴わない動作性の動詞⁹⁾について、その状態や行為がより深まっていくさまを表すとし、「ひどく～だ」のように強調表現になっているとしている。

例：老い込む、切れ込む(目じりの切れこんだ美人)、咳き込む、立て込む、取り込む、眠り込む、寝込む、冷え込む、ふさぎ込む

他動詞については、程度深化の用法に属する語を以下のように三つに分けている。

(1) 「…ヲ～込む」という格支配を取るもの。対象に対してその動作や、行為が深く入っていく。その対象を十分に行うこと。

例：当て込む、買い込む、抱え込む、着込む、しよい込む、刈り込む

(2) 「…ニ…ヲ～込む」という格支配を取るもの。特定の相手に対してある行為を十分に行うこと。「徹底的に～する」という行為であって、「に」格は「…に対して」の意味である。

例：教え込む、(女中に行儀作法を)仕込む、(頭に)たたき込む、頼み込む、つき込む

(3) 「…ヲ…ト～込む」という格支配を取るもの。その対象を「…であると完全に～する」精神的判断。「AヲDト～込む」で、A=Dと見なす。

例：思い込む、決め込む、見込む

3. 程度深化の用法

本論では、まず、前項動詞が現在単独で使われているか、いないかという点において、「～こむ」を二つに分けた。そして前項動詞が単独で使われているときの意味と、「～こむ」の前項動詞として使われているときの意味が、同じか否かという点から更に二つに分けた。なぜ、最初にそのような観点から「～こむ」を選別する必要があるかと言うと、日本語学習者に対する導入を考えた時、学習者は前項動詞が現在でも単独で使われるものであれば、前項動詞の用法から「～こむ」の用法を推測できるが、前項動詞が単独で使われていないものについては、それが困難であると推測したためである。その場合は、別の学習項目として、使用される状況とともに慣用表現として提示したほうが理解しやすいと判

断した。前項動詞が単独で使われるときと、「～こむ」として使われるときで、同じ格支配を持つものは、早い時期からの導入が可能ではないかと判断したことも理由としてあげられる。

その次の段階として、前項動詞の意味が単純動詞の時と、「～こむ」の時とで同じものについて次のような分類を行った。まず、姫野氏の前項動詞の意味的特徴による分類を踏まえ、「～こむ」を前項動詞の特徴によって七つに分けた。そしてそれを分類する際に、森田氏の格支配による意味分類を参考にして分類した。それぞれの動詞群がどのような格支配をとるか、またその主体や対象、および意志動詞であるのか、無意志動詞であるのかという点に着目して分析を行った。

3.1. 前項動詞が単純動詞として、現在でも使われているもの

3.1.1. 前項動詞の意味が複合動詞の中でも変わらないもの

「こむ」が付くことにより、前項動詞のどのような特徴が深められていくかを、それぞれのグループの表題として示した。

①感情、思考活動

このグループに属する前項動詞は人間の感情、思考活動を表し、「惚れる」以外は意志動詞である。「～こむ」全体でも「惚れこむ」「考えこむ」以外は意志動詞である。

(i) 気負いこむ 思いこむ 決めこむ 信じこむ 考えこむ

(ii) 覚えこむ (iii) 惚れこむ

①「Xガ…ト～こむ」 「Xガ…ヲ～こむ」 (i)

②「XガZaヲ～こむ」 (ii) 「XガZbニ～こむ」 (iii)

③ X…主体 Za…対象(事柄) Zb…対象(人・事柄)

例：みんな社長に惚れこんでるようですよ。(女社長)

②心理・身体・事柄の状態

このグループに属する前項動詞は、自動詞で、状態を表す無意志動詞である。主に、人間及び生物の心理状態、身体の状態を表すものが多いが、「収入が落ち込む」のように事柄の状態についても用いられる。また、「冷え込んだ体を温める」「今夜はひどく冷え込む」のように、身体と事柄両方の状態を表現できるものもある。

困りこむ しょげこむ 黙りこむ 弱りこむ ふさぎこむ 老いこむ 老けこむ 老いぼれこむ ぼけこむ
やつれこむ 冷えこむ 落ちこむ 沈みこむ

①「Xガ～こむ」 X…主体(人・身体・事柄)

例：ジョバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまいました。(銀河鉄道)

この中で、「落ちこむ」「沈みこむ」は、方向性添加の用法でも用いられている表現である。「～こむ」の前項動詞のなかには、このように方向性添加の用法と程度深化の用法をともに持つものがある。

グループ①は姫野氏の分類によるところの「固着化」の用法として分類されている動詞である。グループ②は、「固着化」と「濃密化」という異なる分類がなされているものであるが、本論では、一つの項目として分類した。グループ②の動詞で下線がついているものは、姫野氏の分類では「固着化」として一つにまとめられているものである。「固着化」に属する動詞は、「主に人間の心理、生理、思考作用に関するもの」かどうかという基準で選ばれている。一方、「濃密化」に属する動詞の特徴は、「生理的な変化や自然現象の変化を表すものが多い。」としている。これらの基準で分類がなされているが、その中をもう少し詳しく見てみると、それらの動詞がともに人間に関する表現であっても、意志動詞か無意志動詞かという視点から更に分類ができる。又、それらが表現される際の格支配の違いによっても分類が可能である。一方、森田氏の分類では、自動詞か他動詞か、その格支配はどのようなものかという視点で

分類されている。そのため、前項動詞が単独で使われるときと「～こむ」のときとで、意味が異なるものも一緒の項目で扱われている。

③行為自体の蓄積

前項動詞は、何度も繰り返しのきく意志動詞である。「～こむ」全体でも意志動詞となる。

(i) 動作の蓄積の結果、前項動詞に関する主体の技術の向上：自動詞、他動詞

うたいこむ およぎこむ かきこむ きたえこむ なげこむ はしりこむ 弾きこむ よみこむ

(ii) 動作の蓄積の結果、対象の質の向上：他動詞

あらいこむ はきこむ(ほうきで) みがきこむ

(iii) 他者に対して働きかける動作の蓄積：他動詞

おしえこむ おがみこむ せがみこむ たのみこむ なきこむ

「Xガ～こむ」「XガZヲ～こむ」：(i) 「XガZヲ～こむ」：(ii)

「XがZaニ(Zbヲ)～こむ」：(iii)

X…主体 Z…対象 Za…対象(人) Zb…対象(事柄)

(具体例) 他ならぬ伸子社長のためだ。何とか頼み込むよ。(女社長)

④行為の結果、得た物質(事柄)の量の蓄積

前項動詞は、他動詞で、意志動詞である。行為の結果、物質(事柄)を得る動詞である。(i)は行為の結果、対象となった物質(事柄)の量が増え、(ii)は行為の結果、対象(人)に与えた物質の量が増える。

(i) 買いこむ きこむ かぶりこむ たくわえこむ たべこむ ためこむ にこむ はきこむ 借りこむ かかえこむ しょいこむ せおいこむ くらいこむ

(ii) きせこむ かぶせこむ はかせこむ

「XガZヲ～こむ」：(i) 「XガZaニZbヲ～こむ」：(ii)

X…主体 Z…対象(物/事柄) Za…対象(人) Zb…対象(物)

(具体例) あの若さで、全社員の生活に対する責任をしょい込まなくちゃいけないのよ。(女社長)

グループ③及び④は、姫野氏の分類では「累積化」、森田氏の分類では他動詞の(2)として一つにまとめられているものである。本論では、「こむ」が、前項動詞の行為自体の蓄積に焦点を当てているのか、行為の結果得た物質や事柄の量に当てているのかという点に着目して③、④の二つに分けた。

⑤行為の結果、行為以前の状態より領域・量が減少するもの

前項動詞は、行為の結果、自己の領域、又は対象の領域を減少させるものである。

(i) きれこむ はげこむ わりこむ (=下回る)：自動詞 無意志動詞

(ii) つかいこむ はきこむ 刈りこむ けずりこむ きりこむ そりこむ：他動詞 意志動詞

「Xガ～こむ」：(i) 「XガZヲ～こむ」：(ii) X…主体 Z…対象

(具体例)：大手企業も不況のため大幅に経費を削りこんだ。

グループ⑤に属する語は、姫野氏による分類では、内部移動の用法としてあつかわれている。しかし、本論ではこのグループに見られる「こむ」の働きを、方向性を添加するものではなく、ある領域や量を更に減少させるものとして捉え、程度深化用法として分類した。

⑥動作開始後の状態の長期化

前項動詞は自動詞で、前項動詞単独では、意志動詞として用いられるが、「～こむ」全体としては、行為者自身が意識的にその行為を長引かせようという意図が感じられないものが多い。次の用例はそのことを示している。「昨日は夜遅くまで話し込んだ。」とは言えても、「今日は夜遅くまで話し込むぞ。」というのは、不自然な感じを受ける。「こむ」をとった前項動詞だけの表現よりも、「こむ」をつけることによってその状況が深まり、結果として通常よりも長期化することを表すと言える。ここで言う長期化とは、具体的に何時間以上の場合に使うというものではなく、話し手の判断にゆだねられていると考えられるものである。話し手がこの表現を使う際には、その行為がすぐには終了されないであろうということを意図している場合に用いられると考えられる。

(i) はなしこむ かたりこむ ねむりこむ

(ii) あがりこむ たおれこむ かがみこむ すわりこむ しゃがみこむ

「Xガ～こむ」:(i) 「XガYニ～こむ」:(ii) X…主体 Y…場所

(具体例) ・夜遅くまで話し込む。(類語国語)

・タクシーに乗って一分とたたないうちに三枝は眠りこんでしまった。(女社長)

・「待たせてもらうよ」大畑はソファに座り込んだ。女社長)

以上で取り上げたグループの「～こむ」は、前項が単純動詞のときと複合動詞のときとで、格支配が変わらないものである。

⑦程度深化の用法、方向性添加の用法にまたがるもの

このグループに属する語は、程度深化の用法か、方向性添加の用法か、はっきりと区別をつけがたく、どちらの領域にもまたがっていると見られるものである。また、⑦の(ii)に属する語は、次のように使用される状況が限られており、慣用句的に使われていると考えられるものである。「寝る」も「眠る」も同じ人間の睡眠を表す表現であるが、「眠りこむ」では「ぐっすり寝ている状態」を表し、「こむ」が前項動詞の程度を深めると説明できる。一方、「寝こむ」の場合には「寝る」という状態の程度をただ深めているのではなく、「病気で寝ているという」という意味が表れる。「住みこむ」や「泊まりこむ」についても同様の事が言える。長くある場所に住むというだけでは「住みこむ」という表現は用いない。又、ホテルに一泊したということだけでは「泊まりこむ」という表現は使わない。日本語の学習者には、使われる場面とともに、「～こむ」一語として提示したほうが他の用例と区別しやすいと考え、分類の項目とした。

(i) 急きこむ 追いこむ/おさえこむ ふうじこむ ふみこむ のぞきこむ まげこむ まがりこむ めくりこむ めくれこむ だましこむ

(ii) ねこむ/すみこむ とまりこむ (使用状況が限られ、慣用句的になっているもの)

(i) 「Xガ～こむ」 「XガZヲ～こむ」 X…主体 Z…対象(人、物、事柄)

(ii) 「Xガ～こむ」 「XガYニ～こむ」 X…主体 Y…場所

(具体例)

・ゴール直前で、猛然と追い込む。(物事の最終段階で最後の力を発揮する。)(現代国語例解辞典)

・反対派を押さえ込む。(現代国語例解辞典)

・「アクセルを踏み込んでください。」 (“戦車の動かし方” TV『特命リサーチ200X』)

・「大丈夫？」マキが心配して顔を覗き込む。(女社長)

・仕事で会社に泊まり込む。(現代国語例解辞典)

3.1.2. 前項動詞の意味が単純動詞の時と複合動詞の時とで異なるもの

以下のグループに属する前項動詞は現在でも単純動詞として使われているが、複合動詞の中での働きはそれと異なるものである。日本語学習者にとっては前項動詞が単純動詞の時の格支配を参考にして、「～こむ」の意味を推測することが難しいと考えられる。

(i) さしこむ ふみこむ (ii) あてこむ たたみこむ たらしこむ のみこむ はりこむ みこむ / いれこむ
うちこむ たれこむ

(iii) つけこむ はりこむ もうしこむ

(iv) うりこむ (v) きめこむ (vi) ふれこむ

「Xガ～こむ」:(i) 「XガZヲ～こむ」 「XガZニ～こむ」:(ii)

「XガYニ～こむ」:(iii) 「XガYニZヲ～こむ」:(iv)

「Xガ…ヲ～こむ」:(v) 「Xガ…ト～こむ」:(vi)

X…主体 Y…主体が入る / 主体が対象を入れる場所または状態 Z…対象

(具体例) ・遺産を当て込んで遊び暮らす。 (例解辞典)

・緑敏と結婚して、はじめて生活の安定を得、創作に打ち込むようになった。(ガイドブック、放浪記)

・私が自分を売り込むように見られたら、逆効果になるもの。(女社長)

・「サツの旦那にはいろいろとタレ込んで実績があるんだ」(女社長)

・民間人に対しては、法律の知識に詳しくないのにつけこみ、すぐ拘留するなどとおどかし、検察官の意に合うようなことを言わせている。(人民は…)

・奥さんと一緒のところを見て、界限で彼のことを《お上品な》ひとだというわけが、のみこめた。

(異邦人)

・「…大畑さんが、その辺はみんな納得できるような形で処理して下さるから心配はないよ。」

「じゃ、人員整理も、夏のボーナス ゼロもあり得るわけなんですね」伸子がもう一歩踏み込む。尾島もいいかげんな答えではごまかせないと分かったらしい。(女社長)

・まだ達者だと思ったので、この門衛の仕事を申し込んだのだ。(異邦人)

3.2. 前項動詞が単純動詞として、現在はほとんど使われないもの。

このグループに属する語は前項動詞が単純動詞の[ます形](動詞の連用形+ます)で使われることがほとんど無いものである。日本語学習者にとって、「しこむ」などのように、用法が多岐にわたっている場合には、前項動詞「し」から「しこむ」全体の意味を予測することが難しいと推測される。複合動詞「～こむ」全体を一語として扱い、使われる状況と共に説明したほうが理解する際に混乱が少ないと考えられる。

(i) 咳きこむ へたりこむ めかしこむ (ii) しこむ

「Xガ～こむ」:(i) 「XガZヲ～こむ」:(ii) X…主体 Z…対象

(具体例)

・酒を仕込む ・杖に刀を仕込む ・市場で材料を仕込む

・悲報を聞いてその場にへたりこむ。(類語辞典)

4. ま と め

これまでに述べてきた「～こむ」の程度深化の用法をまとめてみると以下のようになる。

「～こむ」の程度深化の用法

I: 前項動詞が単純動詞として、現在でも使われているもの

A: 前項動詞の意味が複合動詞の中でも変わらないもの

(前項動詞が単純動詞のときと「～こむ」とで、格支配が変わらないもの)

- ①感情・思考活動
- ②心理・身体・事柄の状態
- ③行為自体の蓄積
- ④行為の結果得た物質・事柄の蓄積
- ⑤行為の結果、行為以前のものより領域・量が減少するもの
- ⑥行為開始後の状態の長期化
- ⑦程度深化の用法、方向性添加の用法にまたがるもの

B：前項動詞の意味が単純動詞の時と複合動詞の時とで異なるもの

(前項動詞が単純動詞のときと「～こむ」とで、格支配が変わるもの)

II：前項動詞が単純動詞として、現在はほとんど使われないもの。

(前項動詞が単純動詞のときと「～こむ」とで、格支配が変わるもの)

以上の分析より、一口に、「こむ」が前項動詞の動作や状態を深めると言っても、前項動詞の性質により、「こむ」が前項動詞の表す動作や状態のどの部分に焦点を当てているかが異なることが明らかになった。このことは日本語学習者に対する「～こむ」の導入についても、ひとまとめに「程度を深める用法」として扱うよりも、「前項動詞が単純動詞として現在でも使われているもの」で、「前項動詞の意味が複合動詞の中でも変わらないもの」から導入した方が、理解と定着を図りやすいことを示唆していると言える。

5. 今後の課題

現在、程度深化の用法は、方向性添加の用法と同じくらい日常よく使われているが、古語における「～こむ」の用法としては取り上げられていない。⁶⁾中古の時代で見られる用法としてあげられているのは、方向性添加の用法と、「人や物が一箇所に集中して～する。～して混雑する。」という、現在でも使われている「立て込む」のような用法である。この時代の用例には、「話しこむ」や、「老けこむ」といった前項動詞の程度を深める用法は見られない。一方、時代が下って日葡辞書によると「思い込む」の例で、「深く愛する」という例がみられるとある。⁷⁾前項動詞の程度を深める用法は、方向性を添加する用法や、一箇所に集中して～するという用法とどのような関係があるのだろうか。現在の段階でははっきりとは言えないが、程度深化の用法が、突然変異的に出現したものだと考えにくい。単純動詞の「こむ」からの派生ではないかといった推測を姫野氏や森田氏もされているが、その変化の経緯は明らかにされていない。今回行った分類から、程度深化の用法が、方向性添加の用法や一箇所集中の用法と何らかの関わりがあることが推測された。例えば、「泥沼に踏み込む」と言った場合、「足を踏み出して中へ入る」というように、「こむ」の働きは方向性の添加であるが、「アクセルを踏み込んでください。」といった場合はどうであろうか。「込む」をつけることにより「十分にアクセルを踏む」といった意味が出てくる。踏むという行為自体が、「下に向かって」という方向性を伴った行為であるため、行為の進行方向を表現する必要がないということとも関係していると考えられる。このように、同じ動詞で一つ以上の用法を持つものについては、程度深化の用法として分類したものでも、方向性添加の用法を担っていると見られるものや、その逆の場合もあり、きっちりと境界線を引くことが困難な用例が少なからず見られた。今後の研究課題として、程度深化の用法がどのようにして派生してきたか、そして方向性添加の用法とどのような関わりがあるのかについて研究を進めたい。

注：

- 1) 以後、方向性添加の用法と呼ぶ。

- 2) 「こむ」が後接する動詞を前項動詞と呼ぶ。
- 3) 以後、程度深化の用法と呼ぶ。
- 4) 森田(1994)による。「[に/を/と/へ/で/から/まで/より]等の格助詞によってそれらの成分は述語動詞に係っていくが、そのい
ずれと組み合わせさっていくかは各動詞ごと、厳密には文脈中で示すその語の意味によって決定していく。このような動詞と
格成分との関係は意味的に相関関係にあり、動詞の格支配と呼ぶ。」と説明されている。
- 5) 「動きを伴わない動作性の動詞」という表現は、森田(1988) : 『基礎日本語辞典』P453から、そのまま引用した。
- 6) 『角川古語大辞典』、『日本国語大辞典』参照
- 7) 『角川古語大辞典』、『日本国語大辞典』参照

参考文献：

- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』ひつじ書房
斎藤倫明. 1992. 『現代日本語の語構成論的研究』ひつじ書房
佐治圭三. 1992. 『日本語の表現の研究』ひつじ書房
塚本秀樹. 1993. 「複合動詞と格支配—日本語と朝鮮語の対象研究—」『日本語の格をめぐる』仁田義雄編. くろしお出版
寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』(第5章 格言の文) くろしお出版
長嶋善三. 1976. 「複合動詞の構造」『日本語講座 4 日本語の語彙と表現』大修館書店
姫野昌子. 1978. 「複合動詞「～こむ」および内部移動を表す複合動詞」『日本語学校論集』5: 47-70
森田良行. 1994. 『動詞の意味論的文法研究』明治書院
森山卓郎. 1988. 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
寺村秀夫編. 1987. 「複合動詞の成立条件」『ケーススタディ 日本文法』桜楓社
甲斐朋子. 1998. 「複合動詞「～こむ」の分類とその用法」『国文研究』43 熊本県立大学 P.98-112

資料：

- 「語と語との関係解析用資料」—朝日新聞記事データ分析— —“に”を中心とした— 田中康仁 1989年
「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」新潮社版
「基礎日本語辞典」森田良行. 角川書店
「現代国語例解辞典」林巨樹. 小学館
「類語国語辞典」大野晋、浜西正人. 角川書店
「角川古語大辞典」中村幸彦他2名. 角川書店
「計算機用日本語基本動詞辞書IPAL(Basic Verbs) 一辞書編— 情報処理振興事業協会 技術センター. 1987年